

# 哲学研究

第五百九十二号

## 一九二〇年代のヨーロッパの哲学と日本の哲学の形成・発展

藤田正勝

日本の哲学の形成・発展に大きな寄与を行った人々として、われわれは西田幾多郎のほか、田辺元や九鬼周造、和辻哲郎、三木清、高橋里美、天野貞祐、三宅剛一、西谷啓治らの名前を挙げる事ができる。西田幾多郎はヨーロッパに留学する機会をもたなかったが、他の人々は第一次世界大戦と第二次世界大戦、この二つの戦争のあいだの時期、つまり一九二〇年代から三〇年代にかけての時期にハイデルベルクやフライブルク、パリなどに留学する機会をもった。この時期、ヨーロッパ、とくにドイツは第一次世界大戦後の混乱のなかにあったが、しかし思想的にはきわめて豊かな成果が生み出された時期でもあった。今世紀の哲学の大きな潮流はほとんどこの時期に成立、あるいは大きな発展を遂げたとと言ってもよい。哲学の歴史全体を振り返っても、きわめて実り豊かな時期であったと言えることができる。先に名前を挙げた人々は、まさにこの時期にヨーロッパに留学する機会を得たのである。彼らの帰国後の活動は、この兩大戦間のきわめて創造的な哲学の営みに直接触れたことから得た刺激によって支えられたと考えられる。その刺激なしには、彼らの独自の思想もまた生み出されなかったと言ってもよいであろう。彼らが留学中にどのような思想に触れ、そこからどのようにして自らの思想の基盤を形成していったのか、そのあとを振り返ってみたい。

## 一 時代の状況と新しい学問の試み

一九二〇年代は、いわゆる「戦後不安」という言葉でその特徴を言い表すこともできるが、しかし同時に、文化のさまざまな領域において、伝統的なものを打ち破る新しい実験が大胆に試みられた時代でもあった。表現主義やダダイズム、新即物主義など、さまざまな言葉で言い表された新しい試みが、絵画や文学、演劇、音楽、映画、デザイン、写真などさまざまな分野で行われた。のちに「黄金の二〇年代」と呼ばれた文化が花ひらいた時期であったのである。

一九二〇年代が「黄金の」という形容詞を付して呼ばれるのは、動乱の三〇年代と対比してのことである。ナチスの政権獲得、ヴェルサイユ体制の崩壊、フランス人民戦線の拡大と崩壊、スペイン戦争などが端的に示すように、三〇年代のヨーロッパはまさに混乱のなかにあった。

しかし、二〇年代に試みられたさまざまな実験がまったく息を潜めてしまったわけではない。二〇年代の多様な試みの発展・継承がいたるところに見いだされる。混乱のなかにありながら、なお多くのものが生みだされていった時代であった。

文化全体に見いだされるこのような活力と、この時代の思想の多産性とは切り離して理解することはできない。学問や思想の領域でも、新しい実験がさまざまに試みられ、新しい発見が次々になされていったのである。

二〇世紀になされた大きな学問的発見の一つとして「無意識の発見」ということがしばしば指摘される。それまでは意識の、あるいは、デカルトを踏まえて言えば「コギト」の直証性を前提として学問が構築されていたと言うことができる。それに対してフロイトは、意識がその背後に、あるいはその根底に意識にのぼらないものをもつこと、両者の関わりはなかではじめて意識の営みが成立していることを主張したのである。意識はそれ自身ではもはや知の確実な根拠ではありえなくなつたと言つてもよいであらう。

フロイトの精神分析の理論は二〇世紀初頭にはすでに確立されていたが、二〇年代に衝動理論やエス・自我・超自我という心的装置論が形成されるとともに、その「無意識」の理論はより具体的な内容を獲得していった。また、当初フロイトの強い影響のもとで精神分析理論を進展させながら、「無意識」の理解をめぐるフロイトから離れていったユングが、訣別の一つの理由ともなった「普遍的（集合的）無意識」の概念について詳しく論じた『自我と無意識との関係』を発表したのは、一九二八年であった。

さらに二〇年代の哲学的諸潮流に大きな影響を与えたものとして注目されるのは、ユクスキュル (J. von Uexküll) の「環境世界」(Umwelt)論である。ユクスキュルの理論が広く知られるようになったのは、一般の読者向けに書かれた『動物と人間の環境世界への散歩』(一九三四年)を通してであるが、その「環境世界」論は『動物の環境世界と内的世界』(一九〇九年)や『理論生物学』(一九二〇年)などの著作のなかですでに形作られていた。

ユクスキュルの理論の特徴は、動物をその周りの世界、つまり環境世界との関わりの中で捉えようとした点にある。そこで言われる環境世界は、客観的にそれ自体として存在する自然、あるいはその物理的・化学的な変容のプロセスではない。動物が知覚し、それに働きかけるものの総体のことであり、それぞれの動物が何を知覚し、どのような仕方ですらに働きかけるかによって、その相貌を変える。つまり世界はそれに関わる主体のあり方に依存している。種に応じて、それぞれの環境世界があると言ってもよい。そのような環境世界こそが生命体にとっての世界なのであり、それとの連関のなかで生命体は存在している。人間にとっての世界も、そのような意味での環境世界、無数にある環境世界の一つにすぎず、特権性をもったそれではない。このような点を明らかにすることによって、ユクスキュルの環境世界論は、二〇年代に成立、あるいは発展を遂げた哲学的人間学や現象学、ハイデガー哲学（とくにその「世界—内—存在」の概念）などに大きな示唆を与えた。

ユクスキュルが世界を「環境世界」として捉えたとすれば、エルンスト・カッシーラーはそれを「シンボル」の世界

として捉えた。一九二〇年代に刊行した『シンボル形式の哲学』(一九二三、一九二五、一九二九)のなかでカッシーラーは、認識を、それ自体として存在するものの単なる受動的な模写としてではなく、精神による存在への一つの形式付与の仕方として捉えた。精神による形態化によって生じた「像」のなかにわれわれは生きているというのがカッシーラーの考えであった。しかも精神は、認識という局面においてのみ、「像」を形成するのではない。精神は自らのうちに蓄えている自立的なエネルギーによって、さまざまな仕方では存在するものに意味や理念を付与していく。そこにさまざまなシンボルの形象が生みだされていく。認識だけでなく、神話や宗教、芸術もまた独自の「像世界」(Bildwelt)を構築していくのである。そのそれぞれが、独自の捉え方を通して、「現実的なもの」のある特定の側面を構成していると言ってもよい。「現実的なもの」とは、精神がさまざまな仕方では生みだしていく「像世界」の総体にはかならない。

このような仕方ではカッシーラーは世界を、そして人間を新たな視点から見つめ直していった。人間は存在するものを感性や悟性などの機能を通して受け取るだけの存在ではなく、むしろ自らのうちからさまざまな意味を付与し、多様なシンボルの形象を、そして種々の「像世界」を生みだしていく存在として捉え直されている。

先に、一九二〇年代に、学問や思想の領域においてもさまざまな実験が試みられ、多くの発見がなされていったと述べたが、それは、存在とは何か、実在とは何か、人間とは何かということ、新たな視点からさまざまな問い直すことであったとも言ってもよいであろう。簡潔に言い表せば、意識・知・理性・論理(同一性)の側からのみ存在しない人間を見、定義するのではなく、むしろそこからあふれるもの、それらによって覆い隠されるもの、背後にありながら、逆に表面に出ているものを支えているもの、そういったものにまなざしが向けられたと言ってもよい。無意識、環境・場所、感情・欲望・身体、シンボル(差異をもった現実)といったものを視野に取り込みながら、実在とは何か、人間とは何かということが問われていったのである。

## 二 現象学

フッサールの現象学は、一九〇一年から一九一六年までのゲッティンゲン大学時代にすでに確立され、『哲学および現象学研究年報』第一巻に発表された『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』I（一九一三年）などを通して広く知られるに至っていたが、一九一六年から一九二八年までのフライブルク大学時代に、フッサールは現象学の精緻化を図るとともに、フライブルク現象学会を発足させるなど、現象学運動のいっそうの発展に力を尽くした。退職後もまた精力的に活動を続け、『デカルト的省察』（一九三一年）や『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（一九三七年）などを世に問うている。ちょうど第一次世界大戦と第二次世界大戦のあいだの時期に、現象学は哲学の歴史のなかで重要な位置を占めるようになったと言つてよいであろう。

日本において最初にフッサールの哲学に注目したのは、おそらく京都大学に赴任した直後の西田幾多郎であった。『善の研究』出版の年（一九一〇—明治四四年）に発表された「認識論に於ける純論理派の主張に就て」のなかですでに西田は、新カント学派、とりわけリッケルトなど西南学派に属する人々とフッサールとを「純論理派」として一括し、彼らによる「心理主義」に対する批判について論じている。この批判は、『善の研究』執筆直後の西田に、他人事としてではなく、『善の研究』の心理主義的な性格への反省を迫るものとして重く受けとめられた。この批判に触れたことが、『善の研究』以後の西田の思索の発展につながつたと言つても過言ではない。

一九一七（大正六）年に刊行した『現代に於ける理想主義の哲学』においても西田は、のちに自らの場所の論理を説明するためにしばしば用いることになるノエマ・ノエシスの概念に言及しながら、フッサールが『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』のなかで説いた現象学の本質について解説を加えている。

この『現代に於ける理想主義の哲学』の編集には、西田の初期の弟子であった山内（中川）得立が深く関わっていた

が、おそらくその過程で山内はフッサールの現象学への関心をかき立てられたのであろう。一九二〇年から二三年にかけてのヨーロッパ留学に際して、山内は主にライプルクのフッサールのもとで学んでいる。山内と慶應義塾予科教授であった伊藤吉之助とが、おそらくフッサールのもとで学んだ最初の日本人であった。

それに続いてフッサールのもとを訪れたのが、田辺元である。一九二二年にベルリン大学に留学した田辺は、翌年ライプルク大学に移っている。山内からフッサールについての情報を得ていたものと考えられる。

田辺は帰国後、雑誌『思想』に「現象学に於ける新しき転向」(一九二四年)という論文を、そしてその翌年には雑誌『講座』に「認識論と現象学」という論文を発表し、フッサールの現象学について論じている。そこで田辺は、当時の支配的な哲学の潮流として、新カント学派を中心とする「学の哲学」(Philosophie der Wissenschaft)と、すでに亡くなっていたがデイルタイ(一八三三—一九一一)やジンメル(一八五八—一九一八)、さらにはヘルクソン(一八五九—一九四二)らの「生の哲学」(Philosophie des Lebens)とを挙げ、田辺の留学時、後者がはつきりと優勢であったことを述べている。「生の哲学」は、人間の生の全領域を直接的な体験を通して把握しようとするものとして、「学の哲学」の不十分な点を補うものであったが、しかし「生の哲学」も、哲学として厳密な原理の上に立てられなければならないことを述べるとともに、そのような二つの立場を統合しようとして登場したのがフッサールの現象学であるという位置づけを田辺はこの論文のなかで行っている。

しかし同時に田辺はフッサールの現象学が、「可能的にあらゆる意識に普遍なる本質を求めるといふ立場から意識の構造を明にしようとした」ものとして、未だ「生の哲学」が要求した「完全な具体性」を獲得するまでにいたっていない点を批判している。<sup>(1)</sup>

その後、一九二六年には田辺の紹介により、高橋里美、務台理作がライプルクを訪れ、フッサールの講義を聴くとともに、自宅で直接フッサールから現象学について教えを受けている。高橋は帰国後『フッサールの現象学』(一九二九

年)を公にしているが、同じ年に山内得立の『現象学叙説』、佐藤慶二の『現象学概論』が出版されており、二〇年代末にわが国における現象学研究の礎が置かれたと言つてよいであらう。

フッサールの現象学を紹介するだけでなく、その方法を独自の仕方では生かしたものとして注目されるのは九鬼周造の『「いき」の構造』である。九鬼のヨーロッパ留学は九年にわたるが、最初ハイデルベルクのリッケルトのもとで学んだのち、ベルクソンを慕つてパリに移り、一九二七(昭和二)年の夏学期にはふたたびドイツに戻つて、フッサール、オスカール・ベッカーから現象学を学んでいる。

『「いき」の構造』にはハイデガー哲学の影響も強く見られ、その方法論に揺れが見いだされる。<sup>(2)</sup>しかしパリで書き始められた草稿が『「いき」の本質』と題されていたことから知られるように、フッサールの現象学から得た影響も大きかった。たとえば、『「いき」の構造』「六 結論」に対応するパリ草稿の「四 「いき」と民族性」において九鬼は、フッサールの講義『現象学的心理学』に言及しながら、次のように述べている。「民族の特殊の体験は……概念の分析に由つては残余なき迄完全に把握されるものではない。分析に由つて完全に把握され得るものは *essens* である。体験の本質を *essia* と見る場合にそれは直観に由つてのみ十全に目撃されるものである。逆説のやうではあるが直観に由つてのみ本質を把握される概念があることを認めなければならぬ」[E. Husserl, *Ideation, aus den Versuchungen über „Phänomenologische Psychologie“, 1925, S. 23*]<sup>(3)</sup>。

この一九二五年にフライブルク大学でなされたフッサールの現象学的心理学についての講義は、その時には出版されなかった。しかし当時フッサールの助手を務めていたラントグレーベ(Ludwig Landgrebe)がその一部をタイプで打つた原稿が存在している。九鬼はおそらくこのタイプ原稿を閲読したのであらう——その時期については確定できないが——。九鬼はここで、その「エイドス」理解を通してフッサールへの批判もにじませてはいるが、しかし、体験の本質は直観によつてこそ目撃されるという主張は、明らかにフッサールの「本質直観」の概念を踏まえたものと考えられ

る。少なくとも『いき』の構造』の執筆が企図された段階では、フッサールの現象学がその方法的な基礎とされていたことはまちがいが無い。

### 三 ハイデガールの哲学

先に述べたように、田辺元は一九二三年にベルリンからフライブルクに移り、フッサールのもとで学んだが、その夏学期にハイデガールの講義「存在論(事実性の解釈学)」*Ontologie (Hermeneutik der Faktizität)*を聴講している。この講義内容をもとに帰国後田辺は、「現象学に於ける新しき転向——ハイデッガーの生の現象学」を雑誌「思想」に発表した。これは、わが国において——生成の途上にあった——ハイデガールの哲学をはじめて学術的に紹介した論文であった。

田辺はすでに見たように、フッサールの現象学が、なお「生の哲学」が要求した十全な具体性を獲得するにいたっていない点を批判するのであるが、他方、ハイデガールの解釈学的現象学を、その不十分性を乗り越えようとする試みとして位置づけている。つまり、ハイデガールの解釈学的現象学は、「生ける具体的なる意識、換言すれば現実存在 *Das Seiende* そのもの」の「自己理解、自己解釈」として特徴づけることができるというのが、田辺の見解であった。「現象学に於ける新しき転向——ハイデッガーの生の現象学」という表題によって田辺は、そのようなハイデガールの思索の新しさとその意味を言い表そうとしたと言つてよいであろう。

その後田辺は、弁証法の研究や「種の論理」の構築に関心を移していくが、その過程でもくり返しハイデガールの哲学に言及し、それとの批判的な対決を行っている。たとえば「種の論理の意味を明にす」(一九三七年)は、田辺が「種の論理」とは何かをまとめた形で提示した論文であるが、そこでも田辺はハイデガールの哲学を「真の存在に達せざる可能存在の解釈」にとどまるものとして退け、その「自覚存在論」に、主体と基体(種)との否定的相互媒介の論理で

ある「社会存在論」を対置している。

さらに、これは最晩年のことになるが、田辺は「生の存在学か死の弁証法か」（一九五八年攔筆）などの論文を通して「死の哲学」を構想し、そこでハイデガーの「有」の存在論、ないし「生」の存在論との根本的な対決を行っていることも特筆に価する。田辺にとってハイデガーは、その生涯を通して、西田幾多郎とともに、思想上のライバルであったと言ってもよいであろう。

田辺とともに、三木清もハイデガーの哲学に早い時期から注目し、それに強い影響を受けた哲学者の一人である。一九二三年の冬学期にハイデガーはフライブルクからマールブルクに助教として赴任したが、それにあわせて三木はハイデルベルクからマールブルクに移り、ハイデガーの講義を聴くとともに、ハイデガーのもとで学んでいたガダマーからアリストテレスの『形而上学』と『ニコマコス倫理学』について、レーヴィットからフッサールの『論理学研究』について個人的な教授を受けた。帰国後、一九二七年の一月に三木は「解釈学的現象学の基礎概念」を発表し、翌月公刊されることになる『存在と時間』におけるハイデガーの基本的立場を紹介している。先の田辺の論文と三木のこの論文とによってハイデガーの新しい試みが日本に『存在と時間』出版以前に紹介されたのである。

三木が帰国後、最初に出版したのは『バスキアルに於ける人間の研究』（一九二六年）であったが、その成立にもハイデガーから得たものが大きな役割を果たしたことを、三木は「読書遍歴」と題したエッセーのなかで、『パンセ』について考へてあるうちに、ハイデッゲル教授から習った学問が活きてくるやうに感じた<sup>4</sup> というように書き記している。たとえばそこで三木は、中間者である人間がその中間的存在という性格に即して感じる恐怖や戦慄、感歎を単なる心理学的な感情としてではなく、人間の存在論的な原本的規定として、あるいは人間存在の「状態性」として捉えているが、ハイデガーの現存在分析を踏まえてバスキアルが解釈されていることがそこにもはっきりと見てとることができる。

ハイデガーと日本の哲学者との関わりを考える上で、一つの重要な問題と考えられるのは、ナチスに接近したハイデ

ガーを彼らがどのように評価したのかという問題である。ヒトラーが政権の座に着いた一九三三年にハイデガーはフランクフルク大学の総長に就任し、「ドイツの大学の自己主張」というテーマで就任演説を行ったが、それに対して田辺元や三木清がすぐに論評を加えている。ただ、その論調は必ずしも同じではなく、田辺の「危機の哲学か哲学の危機か」は、一方で国家への奉仕ということを語りながら、他方で——国家の問題に積極的な関心をもたない——アリストテレスの学問観に立ち返ることを主張するハイデガーの矛盾を指摘するものであった。

それに対して三木は、その年の十一月に「ハイデッガーと哲学の運命」と題した論文を発表し、民族の「地と血」ということを語るハイデガーの思想を、ニーチェの「運命の愛」(amor fati)の思想に、言いかえれば、「パトス的なものの、従つてまたディオニソスの力での情熱的な肯定」に通じるものとして捉え、そのように「パトス的なもの」に没したハイデガーに対して、「ロゴスの力を、理性の権利を回復せよ」というように要求している。<sup>(5)</sup>

九鬼周造は一九二七年の夏学期にパリからドイツに戻り、フランクフルクのフッサールのもとで学んだが、その冬学期にはマルブルクに移って、ハイデガーの講義を聞いている。このことは、九鬼が一歳年下のこの若い哲学者に大きな魅力を感じていたことをよく示している。

先に指摘したように、九鬼の『「いき」の構造』には方法論に関わる揺れが存在する。パリ草稿では一方でフッサールの強い影響が見るとれると同時に、その「本質直観」の概念に対する批判もまたはっきりと語られている。おそらく一九二四年に雑誌『思想』に発表された田辺元の論文「現象学に於ける新しき転向」を通してパリ時代にすでに『存在と時間』出版以前のハイデガーの哲学に関する情報を手に入れていたのであろう。

それに対して帰国後に出版された『「いき」の構造』においては九鬼は、「いき」の *essentia* ではなく、その *existentia* を問うべき必要性を強調し、方法的にフッサールの現象学ではなく、ハイデガーの立場に立つことを明瞭に表明している。「いき」の本質」という表題が『「いき」の構造』に変えられたことも、この選択を反映したものと見な

することができると。

九鬼は一九二八年の六月にふたたびパリに移り、その年の末にアメリカ経由で帰国の途にいたが、帰国した年に『哲学雑誌』に「時間の問題——ベルグソンとハイデッガー」と題した論文を発表し、また一九三一、三二年の京都大学の特許講義では「ハイデッガーの現象学的存在論」というテーマを取り上げている。さらに一九三三年には「ハイデッガーの哲学」、「実存の哲学」などの論文を発表している。この『岩波講座哲学』に発表された「ハイデッガーの哲学」は、ハイデッガーの『存在と時間』を本格的に紹介したものととして、また「投企」や「被投性」、「現存在」など多くの訳語を確定した点でも、日本におけるハイデッガー研究に大きな影響を与えた。

日本の哲学者とヨーロッパの哲学者との相互交流という観点から興味深いのは、ハイデッガーも九鬼との対話に深い興味を示した点である。のちにハイデッガーは、“Unterwegs zur Sprache” (1959) のなかの“Aus einem Gespräch von der Sprache. Zwischen einem Japaner und einem Fragenden”と題された文章のなかで、九鬼と「いき」をめぐってしばしば議論したことに触れている。ただそこでハイデッガーは、ヨーロッパとはまったく異なった伝統のなかに住む東アジアの人にとってヨーロッパ的概念体系の後を追うことは、必要なのか、またそれが正しいやり方なのかという問いを提起しているが、この問いかけは現在でも重要な意味をもつものと言ってよいであろう。

和辻哲郎は田辺や九鬼、あるいは三木よりも少し遅れて一九二七年にベルリン大学に留学した。三木清などと比較したとき、その留学生活は必ずしも貪欲なものではなかったが、ちょうど留学した年に出版されたハイデッガーの『存在と時間』は熱心に読み、大きな影響を受けている。この留学の副産物とも言うべき『風土』（一九三五年）、そして彼の倫理学そのものの背後に、このハイデッガーの著作との対決ということがあったことはまちがいが無い。

たとえば『風土』の「序言」のなかで和辻は次のように記している。「(ハイデッガーの)人の存在の構造を時間性として把握する試みは、自分にとって非常に興味深いものであった。しかし時間性がかく主体的存在構造として活かされた

ときに、なぜ同時に空間性が、同じく根源的な存在構造として、活かされて来ないのか、それが自分には問題であった。……空間性に即せざる時間性は(6)まだ真に時間性ではない」。この空間性という視点から捉えられた人間の存在構造がまさに「風土」であったのである。

そして和辻はさらに、このハイデガーの不十分性が、ハイデガーの人間理解の一面性に由来していることを述べている。「彼は人間存在をただ人の存在として捕えた。それは人間存在の個人的・社会的なる二重構造から見れば、単に抽象的なる一面に過ぎぬ。そこで人間存在がその具体的なる二重性において把握せられるとき、時間性は空間性と相即し来たるのである(7)。——この二重性こそがまさに、和辻倫理学を支えるものであったと言えることができる。そのような観点から和辻は『人間の学としての倫理学』や『倫理学』においてもくり返してハイデガーの人間理解に対する批判を行っている。このように一方的な受容ではなく、その批判を通して自らの思想の基盤を築いていった点で、和辻のハイデガーとの対決は、哲学の受容の一つのあるべきあり方を示していると言ってよいであろう。

#### 四 マルクス主義の哲学

一九一七年のロシア革命、そして一九二二年のソ連邦の成立が世界の歴史のなかでもった意味はきわめて大きなものがあったが、それと並行してマルクス主義の哲学もまた、多くの人々の注目を集め、さまざまな仕方で論じられた。一方では、革命的実践を支える理論として単純化され、教条化されていくとともに、他方では、教条的なイデオロギーの枠を超えて、その意味が問われていった。たとえば一九二三年にルカーチの『歴史と階級意識』が出版されているが、その「疎外」論や「物象化」論は、客観主義的なマルクス主義の枠に収まらない新鮮な問題提起をほらむものであった。一八八三年のマルクスの死以後、マルクス主義の哲学が語られるときに、その典拠とされてきたのは、多くの場合『反デュリング論』(一八七八年)や『フォイエルバッハ論』(一八八八年)などエンゲルスの著作であった。マルク

ス自身の哲学的な著作が遺稿のなから公にされたのは、ちょうど一九二〇年代から三〇年代にかけての時期であった。エンゲルスとの共著『ドイツ・イデオロギー』の第一巻第一章「フォイエルバッハ」が刊行されたのは一九二六年であり、『経済学・哲学草稿』がはじめて公にされたのは一九三二年のことであった。マルクス自身の思想を示すものとして、その公開は大きな注目を集めた。そして多くの点でルカーチの問題意識と重なるものであったという点でも注意を引いた。

日本においてマルクス主義の哲学への関心が高まりを見せたのも、ちょうどこの時期においてであった。そしてその中心にいたのが、三木清であった。三木がマルクス主義の哲学に関心を示したのは、一九二二（大正一一）年から一九二五年にかけてのヨーロッパ留学の時期においてではなく、帰国後のことであった。帰国の翌年、三木は三高で講師として哲学を教える傍ら、西田幾多郎の推薦により経済学部教授であった河上肇にヘーゲルのテクストの講読をしたり、河上を中心として開かれていた研究会（『経済学批判会』）に参加したりしている。この頃からフォイエルバッハの思想や唯物史観の研究に着手したと考えられる。その成果が一九二七年以降矢継ぎ早に発表された「人間学のマルクスの形態」や「マルクス主義と唯物論」、「プラグマチズムとマルキシズムの哲学」などの論文である。

「人間学のマルクスの形態」のなかで三木が考察の中心に置くのは「基礎経験」の概念である。この概念は、三木が素朴な実在論や反映論から自由にマルクス主義哲学を問題にしようとしていたことをよく示している。

三木によれば「基礎経験」とは、言葉によって「光」が与えられる以前の、つまり言語化を通して具体的な形態を与えられる以前の、「闇」とも表現すべき経験である。別の言い方をすれば、ロゴスが関与し、それによって固定化を被る以前の動的な経験である。われわれはそれをロゴス化することによって、つまり自らのうちでそれに対して自己解釈を加えることによって、さらには、自己の枠を超えてそれに普遍性（公共性）を与えることによって、理論（イデオロギー）にまで彫琢していくのであるが、そのような理論は、いま言った「基礎経験」に支えられているというのが三木

の根本の理解であった。

「経験」という表現は、それが単に意識的なもの、あるいは主観的なものであるという印象を引きおこすが、三木はそれをむしろ「存在的なるもの」として理解すべきであることを強調している。「存在」は、素朴な実在論や反映論では、単なる物質として、あるいは主観に対立する客観として捉えられるが、三木はそれを、つねに、はじめからすでに人間存在との「交渉的關係」にあるものとして捉える。「基礎経験」はこのような意味での「存在」を意味する。その「発展の過程に於て」、主観と客観の対立、認識の問題もまた生まれてくるのである。

三木は上述の論文を収めた『唯物史観と現代の意識』（一九二八年）の「序」において、この著作を通して企図したものが「理論の系譜学」(Genealogie der Theorien)であったことを述べている。「如何にして一定のイデオロギーは出生し、成長し、崩壊し、そして新しいものによつて代わられるか」を明らかにすることがその目的であったことを述べている。そのような関心の上に、三木はマルクス主義の成立を「無産者的基礎経験」から説明することを試みている。

「無産者的基礎経験」とは、単なる意識としてではなく、感性的な存在として、世界に対してたえず実践的に働きかける者の基礎経験であり、そのような存在の自己解釈が客観的公共性のなかへ持ちだされることによつて形成された理論こそ唯物史観であることを、三木はこの『唯物史観と現代の意識』に収めた諸論文で論じている。

このように三木は素朴な実在論や反映論から自由にマルクス主義の哲学を問題にしたが、そのことには三木が、革命の実践を支えるイデオロギーとしてエンゲルスやレーニンの著作をもとに単純化され、教条化されていったマルクス主義哲学を介してではなく、二〇年代に発表されはじめたマルクス自身の文章に直接触れえたことが大きく与っていたと考えられる。<sup>10)</sup>三木のマルクス主義理解は、そのような意味で、一九二〇年代という時代の状況と深く関わっていたのである。

三木のこのようなマルクス主義の哲学的な基礎づけの試みは、彼の周りにいた人々にも強い影響を及ぼしていった。

戸坂潤は、三木の帰国後、谷川徹三や梯明秀ら一高出身の京大の卒業生や学生たちとともに「哲学一高会」を組織し、三木から、彼がヨーロッパで触れた諸思想を学んだが、同時にまた、一九二七年に法政大学教授として東京に移り、マルクス主義者として論壇に登場した三木からも大きな刺激を受けた。一九二九年頃には甘粕石介や梯明秀、真下真一らとマルクスの著作の読書会をもち、本格的に唯物論研究を開始している。戸坂は、三木清が日本共産党への資金援助容疑で検挙され、法政大学教授の職を辞した翌年の一九三一年に法政大学の講師となり、活動の場を東京に移した。そこで岡邦雄、三枝博音らと唯物論研究会を組織し、「唯物論研究」を発刊して、わが国における唯物論研究を中心に担い、同時に多彩な評論活動を展開していった。西田幾多郎のよく知られた歌の一つに「夜ふけまで又マルクスを論じたりマルクスゆゑにい〔寝〕ねがてにする」という一九二九年に作られた歌があるが、「いねがて」にした一人が京都時代の戸坂であったことは疑いが無い。

一九三二年にマルクスの『経済学・哲学草稿』が公にされて以来、日本でもマルクス自身の哲学に多くの人々が関心を向けるようになったが、梯明秀もその一人であった。梯は京大では社会学を専攻し、タルド (Jean Gabriel Tarde) を研究対象としたが、三木や戸坂から影響を受けてマルクス主義の研究に力点を移し、とくにその「物質」概念の検討を通して、「物質の哲学的概念」(一九三四) などの成果を生みだしていった。

西田幾多郎の弟子たちのマルクス主義への注目、西田にも大きな影響を及ぼさずにはいなかった。そのことを端的に示すのが、先に記した「夜ふけまで……」という歌である。日記にも「夜田辺及卒業生七名来会。マルクス論起り十二時過にいたる」などの記述が見える。河上肇を中心に開かれていた研究会に参加してマルクスの『経済学批判』の「唯物史観」の箇所についての講読を行ったこともあるし、先に述べた『ドイツ・イデオロギー』の第一巻第一章が最初に発表された Marx-Engels Archiv の第一巻を経済学部図書館から借り出したりしている。

弟子たちや河上肇らとの議論から刺激を受け、また自らマルクスの著作に触れて、西田は「一般者の自覚的体系」

(一九三〇年)以降、マルクス主義の思想について積極的に自らの見解を発表しはじめている。それを承けてマルクス主義の側からも西田哲学に対する批判が行われた。たとえば戸坂潤は一九三二年に発表した「京都学派の哲学」のなかで、西田哲学を「解釈主義的・超歴史主義的・形式主義的・浪漫主義的……現象学的哲学」と性格づけ、根本において「ブルジョア観念哲学」であることを批判している<sup>(11)</sup>。そして翌年『唯物論研究』に発表した「無の論理」は論理であるか」においては西田の哲学を、存在そのものではなく、存在の「論理的意義」しか考ええない哲学として批判している。

このような戸坂の批判に西田は著作のなかで反論することはなかったが、戸坂宛の書簡では「京都学派の哲学」の批判を肯定的に評価し、次のように書き送っている。「理解のある大変よい批評だと思ふ。教へられる所多いことを感謝する。私のこれまで書いたものが解釈学的だと考へられるのは無理もなからう。私はまだブラクシスを中心とした私の考を書いて居らぬ。……マルキストは *einseitig* で徹底しない所があると思ふ。併しマルキストといふものは十分に理解しその取るべき所は何処までも取りたいとおもふ<sup>(12)</sup>」。

その一面性を西田はたとえばマルクス主義の自然理解のなかに見いだしていたことが、『哲学の根本問題』(一九三三年)などの叙述から知られる。そこで西田は、マルクス主義者たちが自然をどこまでも主観に対立する客観として主知主義的な立場から理解している点を批判している。それは戸坂に対する間接的な反論であったと言えることができるであらう。

田辺元は一九二四年にドイツ留学から帰国後、その研究対象をカントの目的論に、さらにヘーゲルの弁証法に移していく、一九三二年には『ヘーゲル哲学と弁証法』を出版しているが、このように関心を移していった動機について、のちに次のように語っている。「当時、ソヴェエト革命の後を承けたプロレタリア世界革命運動の澎湃たる波濤が我国を襲ひ、マルクシストの理論闘争が学界を動揺せしめ、およそ思想学問にたづさはるもの、何人といへども多かれ少な

かれ、その刺激を受けざるはなかつたといふ事情がはたらいた<sup>(13)</sup>。この言葉は、一九二〇年代から三〇年代にかけて、マルクス主義の哲学が、わが国の哲学的な議論の中心軸の一つであったことをよく示している。

## 五 哲学的人間学

「哲学的人間学」をめぐって議論がなされるようになったのも、一九二〇年代のことであった。その先鞭をつけたのが晩年のマックス・シェーラーである。シェーラーは一九二二年から二八年にかけてケルン大学で生物学の基礎や哲学的人間学の講義を行うとともに、それを踏まえて『哲学的人間学』の公刊を企てていた。一九二八年にシェーラーが亡くなったためにその計画は果たされなかったが（その草稿は一九八七年に全集第二二巻として出版された）、その概要は一九二七年に行われた「人間の特殊な地位」というテーマでの講演、およびそれに基づく『宇宙における人間の地位』（一九二八年）の出版を通してすでに知られていた。この『宇宙における人間の地位』のまえがきのなかでシェーラーは、このときすでに哲学的人間学の諸問題が哲学の中心的な課題となっていることを述べており、一九二八年の段階ですでにさまざまな仕方ですれをめぐって議論がなされていたことが知られる。

この書のなかでシェーラーは、人間の本质とは何かという問いは、人間が世界のなかで——生命全体のなかで——占める地位を明らかにすることによってはじめて答えうることを述べるとともに、その特殊性を「精神」に、つまり、生命体が環境世界から受ける制約やそれへの適応から自由に営まれる働きに求めている。「世界開放性」(Weltoffenheit)こそ人間の地位に特有の性格であるというのがシェーラーの考えであった。

この主張にはユクスキユルの環境世界論への批判が込められていたと言つてよいであろう。シェーラーとともに哲学的人間学の展開に重要な寄与をなしたのはヘルムート・プレスナーであるが、プレスナーもまたその主著『有機的なもの諸段階と人間』（一九二八年）において人間の本质を「脱中心性」(Exzentrizität)に見いだしている。プレスナー

の哲学的人間学の構想もまた、生命と環境との関わりを閉じたものとして理解するユクスキェルへの批判を含むものであったと言ふことができる。

このような議論を承けて、日本では西田幾多郎が一九三一年に「人間学」と題した論文を発表している。「近来一派の哲学者達によつて人間学といふものが唱へられる」という冒頭の言葉が示すように、一九二〇年代のドイツにおける哲学的人間学をめぐる議論が意識されていたことはまちがいが無いが、この論文で西田が主として取り扱ったのは、フランス・スピリチュアリズムの祖とされるメーヌ・ドゥ・ピランの人間学であった。その根底には、哲学は「無にして自己自身を限定する自覚」から出発しなければならないという西田の哲学についての独自の理解があった。そのような立場から西田は、「人間学」に先立って書かれた論文「場所の自己限定としての意識作用」において、次のように記している。「私は哲学は一種の否、真の人間学の意味を有つて居ると云つてよいと思ふ。併しそれは自覚的人間の人間学でなければならぬ、外的人間 *homo exterior* の学ではなくして内的人間 *homo interior* の学でなければならぬ<sup>(14)</sup>」。このような意味での内的な人間学を西田はメーヌ・ドゥ・ピランのなかに見いだしたのである。もっとも西田は論文「人間学」においては、自覚の面だけでなく、人間が身体的な存在であること、そして社会的・歴史的存在であることにも注意を向けている。この面が、西田の思索の発展のなかでいっそう重要な意味をもつようになったことを、『哲学の根本問題』（一九三三年）以後の著作が示している。

西田の「人間学」が発表された翌年、田辺元もまた「人間学の立場」という論文を『理想』に発表している。この論文が発表されたのは、ちょうど西田哲学に対する批判を田辺が開始した時期と重なっており、西田が「人間学」を発表したことを強く意識してのことであったと考えられる。田辺の人間学の理解に特徴的なのは、なにより人間存在の身体性に注目する点であったと言つてよい。田辺の炯眼をそこに見ることができようであろう。そのような観点から田辺は、生の哲学やシェーラーの哲学的人間学、さらにはハイデガーの哲学の不十分性を指摘している。

このように西田や田辺によって先鞭がつけられた哲学的人間学の研究に本格的に取り組んだのが三木清であった。一九三三年に三木は『哲学的人間学』を岩波全書の一冊として出版することを企てている。しかし、この『哲学的人間学』は一九三三年から一九三七年にかけて、何度となく書き直され、校正刷まで出ながら、実際には出版に至らなかった。『構想力の論理』の第一章「神話」の最初の部分が雑誌『思想』に発表されたのが、一九三七年の五月であり、三木は『哲学的人間学』の出版を断念することと引きかえに、『構想力の論理』の執筆を始めたとも考えられる。

この『哲学的人間学』の第一章「人間学の概念」のところで三木は、この本の主題である人間学について、その特徴を他の学問——たとえば生理学や心理学——から区別して、人間をその全体において取り扱う点に見いだしている。そしてそれは三木の表現で言えば、「人間を身体から抽象しない」ということを意味した。「人間を身体から抽象しない」ということは、つまり、人間を単なる意識に、あるいは精神に還元してしまわないことを意味している。そこで言われる身体は、もちろん人間から抽象された身体、単なる客観的分析の対象としての身体ではない。「心に活かされた」<sup>(15)</sup> *beeet* 身体」である。「主体性」における身体と言ってもよいであろう。身体をいわば人間の身体として、そして人間をその身体性においてとらえるのが、三木の構想する人間学の課題であったと言える。

そしてそこでパトスに注目している点に三木の人間学の特徴が見いだされる。われわれの身体が単なる物体ではなく、「心化した」身体、つまり「心に活かされた身体」であるのは、そして逆に、われわれの心が単なる意識ではなく、「身体化した」心、「具体化した」心であるのは、われわれがわれわれのうちにパトスを有しているからだという理解が、三木の人間学をその根底において支えていたと言ってもよいであろう。

三木の『哲学的人間学』は未刊のままに終わったが、それに代わってまとまった形で哲学的人間学を世に問うたのが高山岩男である。一九三八年に公刊された高山の『哲学的人間学』は、生命という根底的な事実から出発し、労働や文化を経て理性へと進み、さらにその限界において超越的なものに直面する人間の自覚的発展の跡を辿ろうとするもので

あり、シェラーやブレスナーの哲学的人間学とは異なった独自の内容を有する人間学の試みであった。

一九三八年から翌年にかけてはさらに理想社から『人間学講座』全五巻が出版され、その第一巻『人間の哲学的考察』には九鬼周造の「人間学とは何か」などが収められている。この時期にわが国における哲学的人間学をめぐる議論は一つの頂点に達したと言ってよいであろう。和辻哲郎が『風土』（一九三五年）において、人間は——アントロポロジーのように——ただ単に「人」としてではなく、「人」と「社会」という二重性格において捉えられなければならない」と主張したことも、哲学的人間学をめぐる議論に一石を投ずるものであった。

以上で見たように、第一次世界大戦と第二次世界大戦、この二つの戦争のあいだの時期にヨーロッパで成立、あるいは大きな発展を遂げた哲学諸潮流の創造的営為に直接触れることによって、わが国の哲学者たちによっても、多くの独自の、そして内容豊かな成果が生み出されていった。ただ単にヨーロッパの哲学の新しい試みが受容され、研究の礎が築かれたというだけにとどまらず、その発想や方法から刺激を受け、創造的な思想が紡ぎだされていった。わが国の哲学の歴史を振り返ったとき、誰しもこの時代に生み出されたものが放つ独特の輝きを認めないわけにはいかないであろう。

注

- (1) 『田邊元全集』（筑摩書房、一九六三—一九六四年）第四卷二二頁。
- (2) 藤田正勝「『いき』の構造」再考」、坂部恵・藤田正勝・鷲田清一編『九鬼周造の哲学』（ミネルヴァ書房、二〇〇二年）一一九頁以下を参照。
- (3) 『九鬼周造全集』（岩波書店、一九八〇—一九八二年）第一卷二〇二—二〇三頁。
- (4) 『三木清全集』（岩波書店、一九六六—一九六八年）第一卷四一九頁。

- (5) 『三木清全集』第一〇卷三二〇頁。
- (6) 『和辻哲郎全集』(岩波書店、一九六一—一九七八年)第八卷一一二頁。
- (7) 同書二頁。
- (8) 『三木清全集』第三卷八一頁。
- (9) 同第三卷三頁。
- (10) この点については、平子友長「昭和思想史におけるマルクス問題——『ドイツ・イデオロギー』と三木清」、『日本の哲学』第一号(二〇一〇年)九二頁以下を参照。
- (11) 『戸坂潤全集』(勁草書房、一九六六—一九六七年)第三卷一七二—三頁。
- (12) 『西田幾多郎全集』(岩波書店、二〇〇二—二〇〇九年)第二二卷一二二頁。
- (13) 『田邊元全集』第三卷九頁。
- (14) 『西田幾多郎全集』第五卷八九頁。
- (15) 『三木清全集』第一八卷一四九頁。

(筆者 ふじた・まさかつ 京都大学大学院文学研究科教授／哲学)

---

---

## THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

---

---

### Europäische Philosophie in 1920er Jahren und Entwicklung der Japanischen Philosophie

*by*

Masakatsu FUJITA

Professor of Japanese Philosophy  
Graduate School of Letters  
Kyoto University

Wir können außer Kitaro Nishida Hajime Tanabe, Shuzo Kuki, Tetsuro Watsuji, Kiyoshi Miki usw. als die Philosophen angeben, die viel zur Grundlegung und Entwicklung der Japanischen Philosophie beigetragen haben. Nishida hatte keine Gelegenheit, in Europa zu studieren oder zu forschen, aber die anderen konnten sich zwischen zwei Weltkriegen, nämlich in 1920er und 1930er Jahren in Heidelberg, Freiburg, Paris usw. aufhalten. Es herrschte zwar zu dieser Zeit nach dem ersten Weltkrieg in Europa, vor allem in Deutschland, ein großes Durcheinander, aber viele Früchte wurden im Bereich der Philosophie hervorgebracht. Fast alle bedeutenden philosophischen Schulen im 20. Jahrhundert sind zu dieser Zeit entstanden oder haben sich sehr entwickelt. Diese Jahrzehnte waren viel erfolgreicher im Vergleich zu jeder anderen Perioden in der ganzen Geschichte der Philosophie. Jene Philosophen hatten Glück, zu dieser Zeit in Europa zu forschen. Ihre wirkungsvollen Arbeiten nach dem Heimkehr wurden von den Anregungen gefördert, die sie dadurch erhalten haben, dass sie direkt mit den schöpferischen Tätigkeiten der europäischen Philosophen in den 20er und 30er Jahren in Berührung kamen. Ohne diese Anregungen wären ihre kreativen Gedanken nicht entstanden. Wir versuchen in diesem Aufsatz ins klare zu bringen, wie sie jene Philosophien, z. B. die Phänomenologie Husserls, die hermeneutische Phänomenologie Heideggers, den Marxismus, die philosophische Anthropologie aufgenommen, und wie sie anhand dieser Philosophien ihre eigenen Gedanken geschaffen.